

天安門事件以後の中国教会

丁光訓・フィリップ・ウイッケリ

北京の天安門において、民主化をもとめて集まった中国の学生たちが、中国当局の強硬な処置によって武力をもって鎮圧されたのは1989年6月4日のことであった。

民主化の方向を模索しながら着実に前進している東欧の歩みとは、丁度、逆行しているようなあの天安門事変以後の中国において、学生たちの民主化の要求を支持していたキリスト教会は現在どのような状況になっているのだろうか。

現在、香港で発行されている『チャイナ・トーク』(China Talk)誌の1989年11月号には、中国キリスト教協議会の議長であり、中国キリスト教三自愛国運動委員会委員長の丁光訓主教が、昨年11月14日に南京において、愛徳基金の海外コーディネーターであるフィリップ・ウイッケリ(Philip Wickeri)博士のインタビューをうけている記事が掲載されている。このチャイナ・トーク誌はアメリカ合同メソジスト教会の香港・中国連絡事務所(Hong Kong China Liason Office, World Division, General Board of Global Ministries, The United Methodist Church, 2 Man Wan Road, C-17, Kawloon, Hongkong)のゲイル・V・クールソン(Gail V. Coulson)宣教師によって編集発行されている中国情報誌である。以下のインタビューはそのVol. XIV No 5 / 6, Nov. 1989, p. 2 f.に掲載されたものである。 (熊澤義宣訳)

—教会は6月4日に起こったことや、現在の「ブルジョア的自由化」に対する

る批判によって、どのような影響をうけましたか。

丁：政府はその信教の自由についての政策を再確認しています。教会の生活、活動はどうにか通常通りなされるようになってきています。わたしはブルジョア的自由化への批判が、教会に対して逆効果になるのではないかと恐れましたが、わたしの知る限りではそのようなことはおこりませんでした。これは信教の自由について、現在は以前よりも理解が進んでいることを示しているとわたしは思います。中国教会が人民の理解と善意をつづけて受けれるようになるに、海外のキリスト者・団体からの反中国宣伝が中止するよう願っています。

一海外では三自愛国組織が解散されるのではないかということがおおいに話題となりました。これが正確な情報ではないと理解してもよろしいのでしょうか。

丁：その通り。このたぐいは誤解か、歪曲のせいです。

一しかし、中国の教会は自治、自養、自伝を達成した現在、さらに何を目指しているのですか。

丁：三自がどのように原則としてよいものであっても、それを展示するのではなく、適応することが大切です。中国のキリスト者たちは、わたしたちの教会がよく治められ、よく養われ、よくキリスト教伝道のわざがなされているのを見たいと願っています。わたしたちの気持ちは、たとえば詩編120から134の都もうでのうたで示されているような、エルサレムの繁栄を求めるイスラエルに近いのです。

一しかし、これらることは皆教会とかキリスト教協議会の第一義的な仕事ではないのでしょうか。

丁：その通りですが、三自の組織は信教の自由の政策の含蓄するところを改善し、キリスト者たちが一層政治的な自覚をもって、三自の原則をもって正しい道にとどまるなどを助け、物質的にも精神的にも、キリスト者たちがわたしたち中国の文化を形成するのに奉仕し、さらに、社会と教会に仕えることを奨励するために、とくに政府や世俗の組織と密接に働くことを好むのです。

紀 要 1

各個教会やさまざまな段階のキリスト教協議会はこれらのこととを確実におこなっていくべきですが、わたしたちは三自の組織が教会やキリスト教協議会とともにこれらの領域でいっそう効果的に働いていると見ています。

—「関係の調整」とは一体どのようなことなのでしょうか。

丁：三自の組織が、歴史的な状況のゆえに、もともと教会やキリスト教協議会がやった方が適切であるような事柄を取り扱ったり、決定を下したりするような立場になってしまったようなところでは、調整が必要なのです。三自の組織もキリスト教協議会もその規約に与えられている目的に固執して、お互いに主人としてではなく、しもべとして理解すべきです。

—聖書は出版されていますか。

丁：はい。簡略体のもの、そうでないもの、上帝を用いているもの、神を用いているもの、引照つきのもの、詩編つきの新約聖書など各種のものが出版されています。わたしたちはまた少数民族の言語の聖書もますます出版しております。

—それでは（中国への）聖書の密輸はあがつたりですね。

丁：その通りです。

—マニラにおけるローザンヌⅡに中国のキリスト者が欠席したのは6月4日の（天安門事件の）結果だと報じられています。これは正確な説明でしょうか。

丁：いいえ、これは誤った説明です。中国キリスト教協議会はすでに（1989年の）5月18日に、ローザンヌⅡが中国の国内問題に介入し、中国人参加の問題に対して分断的なアプローチをしてきたことに反対する公開声明をだしています。ローザンヌⅡの組織委員会も知っている通り、このことが中国キリスト教協議会が参加者をおくって協力することを不可能にしたのです。

—海外のあるグループからあなたや中国の教会に対して攻撃の論調が高まってきたことに対して、どのように反応なさいますか。

丁：信教の自由はかなり増加していますし、その割合はさらに増加しています。教会とそのキリスト証言のために、わたしたちは国家に対決することを原則としていません。協議、対話、批判の余地はあるのです。海外からの攻撃は

ただキリスト教的な思いやりの欠如を感じさせます。

わたしたちは攻撃については知っています。というのは文化革命中にも厳しく攻撃されたからです。その時、神はなぜそのような不正な攻撃を許されるのか分からなかったこともありました。しかし、今になって見ればそれがより力強い証しをするためだったということがわかりました。四人組によって苦しんだことによりわたしたちの信用は高まり、人々はわたしたちの証しに耳を傾けるようになっているのです。

今日、わたしたちは他にもっと大切なことがありますので海外からの攻撃にあえて答えてはいません。中国のことわざにこう言われています。「もし、あなたの批判が正しければ、自分を正せ。もし、彼が正しくなければ、あなたの道に固執し、さらに努力せよ。」

一最後に一つ。あなたの御覧になるところでは愛徳基金の事業はどのように進んでいると思いますか。

丁：一般的にいって大変よくいっています。保健、社会福祉、農村開発などの分野でのわたしたちの仕事は拡大さえもしています。わたしたちはこの愛徳基金は海外のキリスト者たちが中国の事柄に効果的に参与する道を残したと思います。